

国外実態調査報告書

テーマ :
ゼミ名 : 小田 悠生 ゼミ
調査日 : 2024年1月30日(火)~2月8日(木)
調査先 : 【アメリカ】ボストン・ハーヴァード大学、ニューヨーク・エリス島
コロンビア大学
授業科目名 : 国際教養演習 I・II
参加学生数 : 7名(3年生)、2名(4年生)

調査の趣旨(目的)

本ゼミでは、植民地期から現代までのアメリカ合衆国の歴史と文化について学んできた。本調査では、東部を代表する二大都市ボストン・ニューヨークを対象に、主に次の二つの点について調査を行った。一つは、歴史の記憶が都市景観にどのように刻まれているのかについて。一つは、大学と地域コミュニティの関係構築について。集合的記憶の場としての公共空間の保存・形成や、キャンパス拡張や地域再開発で生じる、生活の場としてのネイバーフッドの維持の問題について調査を行った。

調査結果

ボストンでは、近郊のハーヴァード大学(ケンブリッジ市)と、ボストン市内の史跡を訪れた。ハーヴァード大学では、神学部で学ぶ同大学院生と、同学部教授・大学協会牧師の先生の案内のもとに、プロテスタント会衆派の指導者育成組織として当初は設立された同大の歴史と今日の課題について学んだ。マサチューセッツ州は、北米のなかでは比較的早くに奴隷制度を廃止した地域ではあるものの、奴隷制度は英領植民地に遍在しており、ハーヴァード大学も例外ではない。近年、アメリカ合衆国の大学では、大学と奴隷制度との関わりについての歴史を明らかにし省みる必要性が問われており、ハーヴァード大学でも、かつて同大で働いていた奴隷とされた人々の足跡や記録をキャンパス内の各所に刻む事業が進行中であることが確認された。19世紀初頭から半ばのボストンは、奴隷制度反対運動や奴隷制度廃止運動の重要拠点であった。19世紀末までアフリカ系アメリカ人が多く暮らしたビーコンヒル地域は、その後の移民の流入や、ジェントリフィケーションを経て、現在は高級住宅街として様変わりしている。しかし、その足跡や史跡の一部は、今日 Black Heritage Trail として残されており、アフリカ系アメリカ人児童のための初の公立学校や集会場が史跡として公開されている。同地区ではアフリカ系アメリカ人博物館のレクチャーに参加し、ゼミでの文献や映像資料をもとにした事前学習から、さらに学びを深めた。

ニューヨークでは、エリス島移民博物館・自由の女神博物館、9/11メモリアル、コロンビア大学とニューヨーク湾内に位置するエリス島は、19世紀末から20世紀初頭にかけて入国審査場が設けられた地である。ボストンが「古いアメリカ」の源流とされたのに対して、エリス島は、より新しいヨーロッパからの移民たちやその子孫が、20世紀半ば以降に、自

分たちのアメリカへの歩みを記憶する場所として、保存を求めた地である。しかし、地価が全米一高いニューヨーク市において、史跡としての保存と不動産開発のあいだには、強い摩擦が生じた。また、史跡としての保存が決定した後にも、どのような記憶を残すのかという点については紆余曲折があった。エリス島は、アメリカへの最初の一步の地であったと同時に、検疫による長期入院・抑留、ヨーロッパへの送還が行われた「涙の島」とも呼ばれた島であったためである。そうした多義的な記憶を、エリス島に開設された全米移民博物館は、どのように今日の来訪者や観光客に向けて伝えようとしているのか、あるいは何を伝えていないのかについて展示を巡りながら考察を行った。それとともに、移民をめぐる歴史的な記憶が、2024年現在のアメリカ社会における移民をめぐる論争や政治に、どのように反映されているのかについて検討した。

また、ニューヨークでは、コロンビア大学と隣接するハーレム地区を訪れた。都市型大学である同大では、キャンパス拡張にあたって、用地取得と近隣地域コミュニティとの関係構築が長年のあいだ大きな問題となってきた。同大の位置するモーニングサイド地区と隣接するハーレム地区の所得格差は極めて大きく、全米屈指の富裕大学である同大がその経済力のみを後ろ盾に土地・不動産取得を進めることは、深刻な倫理的問題を孕んでいる。そうした状況のなかで、地域住民のための雇用創出センターや、大学の知を地域に開かれたものとするための取り組みについて調査を行った。



エリス島全米移民博物館にて



ハーヴァード大学教会にて